

地域経済ウォッチング

いわき民報 2011年2月24日(木曜日)

「大学生の力を活用した集落活性化事業」塙町矢塚区のケース(中)

—調査、分析をもとに提示した学生のアイデア—

強みをいかし、弱みを克服して強みに変える

東日本国際大学経済情報学部教授/地域経済・福祉研究所長

福迫 昌之

福島県では、過疎・中山間地域の集落の活性化を目的に、昨年度から「大学生の力を活用した集落活性化事業」を実施しており、今年度東日本国際大学では、地域まちづくり研究グループが塙町矢塚区の調査を行った。今回調査にあたった地域まちづくり研究グループは経済情報学部の2、3年生有志7名による女子学生ばかりのグループである。

今回の調査では地区住民へのヒアリングおよびアンケート調査、現地のイベントへの参加や実地見学などを行った。

アンケート調査では、既述の整備事業計画を含め、矢塚区の現状と地域活性化についての意見を聴取するため、矢塚区民の全世帯に対し実施した。寄せられた主な回答を列記してみる。

- 矢塚地区 30 戸で高齢化が進んでいる中、里山プラス地域活性化が頭に浮かばない
- 豊富な森林資源、新緑、紅葉の美観は際立つ。山頂の景観は素晴らしい
- 育牛・トマト・インゲン・トルコ桔梗を産出しているが地域ブランドは無い

- 地域共同体としての人間関係は濃密であり、区の一体感も強い
- 結婚適年齢者が結婚していない
- 廃屋や無住宅家屋があり、集落の荒廃感を印象づける
- 農産物を作っても農協だけが頼りなので売価が低い
- 農閑期なら手伝う・労働力で協力する
- 活動主旨を地域住民に説明説得して地域一体で参入できる為に働きたい
- 矢塚区の将来ビジョンを明確に定めて取り組む必要がある
- 増大する高齢者の労働力を活用する新たな産業の開発は無いか

ヒアリング調査は、①矢塚区役員の方々(本事業の中心メンバー)、②矢塚区民との座談会(区民 30 人余りが参加)、③戸別ヒアリング調査を実施した。とくに③については、区の中心メンバーにコーディネートしていただき、区内の特徴的な家を訪問し、学生がヒアリング調査を行った。地域の人々、高齢者の方々から生の声を聞いたことは、学生にとっても刺激になったようである。

これらの調査から浮かび上がってきたのは、中山間地、過疎地域に共通する課題と埒町矢塚区の特長である。矢塚区の強みとしては、「濃密な人間関係、区の一体感も強く、中心メンバーのやる気がある」「食材が豊富(山菜、高原野菜)」「豊富な森林資源、河川、新緑、紅葉の美観」「標高が高いため、夏でも涼しいなど春～秋は過ごしやすい気候」などが挙げられる。また弱みとしては、「情報通信インフラおよびソフトの不足」「交通アクセスが悪い」「高齢化・人口減少・若者が少ない・嫁が来ない」「農産物を作っても売価が低い(規格外野菜がもったいない)」「地域ブランド力がない、地域づくりのノウハウ+経験不足」「女性の活用不足」

などが挙げられる。

これらの分析を元に、グループでは「女性のための温泉と自然の健康&美容ツアー」「情報発信・ネット販売」「高原野菜・山菜のブランド化」「矢塚キッチン(地元の野菜を使って)」「二地域居住」「グリーンツーリズム」などのアイデアを提示した。基本は強みを活かし、弱みを克服して強みに変えることである。ただし、これは言うは易く行うは難し、であることは言うまでもない。

今回は、少人数かつ女子ばかり、またこうした本格的調査は全員が初体験ということで、不安を抱えての調査となったが、地の利を生かして計6回現地調査に赴くことができたことは、他県の大学には出来ない一つの成果でもあろう。また矢塚区の活性化のためのアイデアを提示する、という当初の目的は何とか達成することができた。しかしながら、これらのアイデアを実行に移すためには多くの課題が山積している。アイデアが有効である保証もない。学生にとって(あるいは地域住民にも)調査は貴重な経験であったことは疑いないが、それ自体が目的化しては事業目的と乖離してしまう懸念もある。多くの問題を抱える中山間地に大学生の力がどれだけ有効かについても考えてみる必要もあるだろう。